

発達3(216~223)

座長 今川峰子・城 仁士

- 216 子どもの空間表象についての一研究
——健常児との比較をとおしてみた精神薄弱児の
空間表象について——
　　静岡大学 小森伸子
- 217 空間認知の発達に関する縦断的研究(第2報告)
　　聖徳学園女子短期大学 今川峰子
- 218 子どもの空間視点協応に関する発達的研究
——空間遮蔽が課題遂行に及ぼす影響を中心として——
　　広島大学 龍祐吉
- 219 幼児の絵地図読み取りに関する研究
　　茨城キリスト教短期大学 立木徹
- 220 視空間の記憶イメージに関する研究(3)
——幼児における距離の記憶と知覚——
　　富山大学 古川雅文
- 221 幼児の地図学習に関する研究
　　東北大学 進藤聰彦
- 222 投影行為の形成プログラム
　　長崎大学 城仁士
- 223 乳児における対象間の空間的関係の理解
　　大阪教育大学 清水光弘

質疑応答と討論

216 (小森)に対して、城より「経験の補償作用」とは何かとの質問があった。小森は、これを日常的な運動・感覚的経験の記憶表象等の形成を容易にする作用という意味で用いたと答えた。

217 (今川)へは、浅川(兵庫教育大)から課題によっては4歳より幼少の時期から検討した方が良いのではないかとの意見が出された。今川は、積み木課題については実施しても良いと考えるが、目と手の協応動作的課題と認知課題との間の発達関係を検討するのが目的なのでこの年齢から実施したと答えた。また、橋本(大阪大)より、縦断的研究の利点は、個人差とスキル達成の過程をチェックし得る点にあり、その意味から個人毎に発達カーブを分析する方法が良いのではないかとの意見が出された。これに対し、今川は発達の同期性を問題にしているので、全体的な認知構造の推移をまず確認したかったと述べた。

218 (龍)に対し、城から①データを角度毎に整理しなかったのはなぜか、②各地点での写真の選択傾向を分析すれば、近接反応の内容がもっと明確になるのでは

ないか、等の質問や意見が出された。これに対し、①CornerおよびSide View内で、角度による差が見られなかったから、②写真の選択傾向という視点からデータを再分析してみたい、との回答があった。浅川より、遮蔽の方法としてなぜスクリーンにしたのか、また今川より遮蔽効果が6歳児に見られないのはなぜかとの質問があった。前者については従来の方法との違いは現在のところわからないが、後者については、課題が6歳児にとって容易すぎたためと答えた。

219 (立木)には、吉村(東京女子大)が、正規の地図(北が上)学習との関係はどう考えているのか、また今川より、表裏庭のみ逆転させたのはなぜかとの質問が出された。立木は、現在のところ、子ども側の視点に立った地図を作成し、これを実践の場に導入することの意味や問題点を探っている段階で、正規の地図学習への移行は今後の問題としていると述べた。

220 (古川)に対して、横田(群馬大)より再認法と再生法についての質問があり、この手続では距離を記憶したという保証がないのではないかという意見が述べられた。古川は、距離情報をどう精密に保持しているかはあいまいな点もあるが、適合度がかなり高いので再認法の妥当性はあると答えた。城より個人毎にベキ指数を求め、その平均値を問題にしているが、全データから一次回帰を求めるべきではないとの質問が出され、古川より前者は後者と同値関係にあるとの回答がなされ、この手法の積極的意義が述べられた。

221 (進藤)には、橋本よりなぜ左右対応づけとルート課題を比較したのか、教示、言語理解上のレベルに差がない課題とする必要があるとの意見に、進藤は空間認知の一般課題として用いられたものを試行錯誤的に調べたものなので、意見を取り入れて今後の検討課題としたいと述べた。

222 (城)へは、浅川より点を支える棒の影響はないか、また今川よりプログラムの転移効果についての質問が出た。城は、棒の影響は訓練、テスト事態でもほとんどないこと、プログラムの前後に2点投影課題や3山問題を実施した結果、両者とも訓練の効果が顕著に認められたことを報告した。

223 (清水)に対して、水谷(京都教育大)より内側遮蔽事態の問題点を述べてほしいとの要望があり、清水は、①コップに切り口があったこと、②静止している探索対象に遮蔽する方がより自然ではなかったか、③探索対象の移動が乳児の注意を引きつけすぎる、等の問題点を取り上げた。

(城 仁士)